

俳人協會三十年小史

俳人協會三十年小史

俳人協会三十年小史

頒価一〇〇〇円

平成三年十月七日発行

編集兼発行者／草間時彦

発行所／社団法人 俳人協会

〒169 東京都新宿区百人町三―二八―一〇

俳句文学館内

電話（〇三）三三六七―六六二一（代表）

FAX（〇三）三三六七―六六五六

振替（東京）六一二七三

印刷所／徇 鋭 文 社

はじめに

昭和三十六年十一月十六日、俳人協会発足の日から数えて満三十年。幸い俳句隆盛のうちに、今日を迎えることができた。

当初会員数は、わずか三十余人。逐年順調に発展を重ね、今日では会員数一万人を超えるに至った。

その間、昭和四十六年十二月十七日には、文部大臣の認可を得て、社団法人組織となり、また五十一年三月二十八日には、多くの方々の協力の下、かねて待望の俳句文学館の竣工をみた。

以降、文学館を活動の拠点とし、一つには伝統俳句の正しい伝承と普及に力を注ぎ、一つにはわが国唯一の現代俳句専門の図書室としてその機能の充実に努めてきた。

この小史は、当協会三十年の歩みをとりとめたものである。

平成三年十月

社団法人 俳人協会
会長 澤木 欣一

目次

はじめに……………	澤木欣一……………	1
昭和三十六年……………		5
昭和三十七年……………		5
昭和三十八年……………		6
昭和三十九年……………		7
昭和四十年……………		8
昭和四十一年……………		10
昭和四十二年……………		11
昭和四十三年……………		12
昭和四十四年……………		13
昭和四十五年……………		15
昭和四十六年……………		17
昭和四十七年……………		19
昭和四十八年……………		22
昭和四十九年……………		24
昭和五十年……………		27
昭和五十一年……………		30
昭和五十二年……………		33

昭和五十三年……………		37
昭和五十四年……………		40
昭和五十五年……………		43
昭和五十六年……………		47
昭和五十七年……………		51
昭和五十八年……………		56
昭和五十九年……………		61
昭和六十年……………		66
昭和六十一年……………		71
昭和六十二年……………		76
昭和六十三年……………		83
平成元年……………		92
平成二年……………		99
あとがき……………	岡田日郎……………	107
〈資料〉		
・俳人協会賞・新人賞・評論賞一覧		
・全国俳句大会・関西俳句大会一覧		
・収蔵図書の推移・会員数の推移		
・定款		

昭和三十六年

十一月十六日 俳人協会設立の日

第二回発起人会・第一回幹事会（第一回発起人会は十月十六日）を開催し、この日をもって協会発足の日とした。事務所は当分の間、角川書店に置かれた。

第一回発起人会において、会長・中村草田男、顧問に飯田蛇笏、富安風生、水原秋櫻子、山口青邨、山口誓子を委嘱。会の大綱を決め、設立総会までに三十人程度に呼びかけることになった。

第一回発起人会の決定事項を受けて、会則・会員をかため、第一回俳人協会賞候補者として石川桂郎をあげ、検討の結果幹事全員これを支持して決定した。

十二月一日 「俳人協会清規」発表

角川書店発行「俳句」十二月号に次のような「清規」を発表。

一、本協会は会員相互の信頼と良識によってその親睦をはかるとともに、俳句の伝統を基盤としてその正しい発展に寄与することを目的とする。

二、本協会はその目的を達するために必要な諸事業を行う。

三、本協会に入会しようとする者は、幹事一名及び会員一名の推薦により、幹事会の承認を受けなければならない。

四、本協会の会員は所定の入会金及び会費を納めなければならない。（入会金は一、〇〇〇円、会費は年額一、〇〇〇円とする。）

五、本協会に顧問若干名、会長一名、幹事若干名を置く。（当分の間発起人が幹事となる。）

六、この清規に規定のない事項については、幹事会の協議によ

って決める。

昭和三十六年十一月十六日

十二月二十一日 設立総会

東京・飯田橋の大松閣で設立総会を開催、あわせて第一回俳人協会賞授賞式を開催。富安風生、水原秋櫻子顧問外十八人出席。挨拶、報告、授賞の後、和氣彌々裡に今後の協会の進めかたについて懇談が行われた。

昭和三十七年

四月一日 西東三鬼逝去

幹事の一人であった西東三鬼が享年六十一で没した。

四月六日 幹事分担事項

第六回幹事会を開催。会員の増大に伴い、幹事分担事項を大体的に決定。

総務（庶務・会計） 安住敦 岸風三樓

出版（年鑑・会報） 大野林火 石川桂郎 香西照雄

事業（講演会・協会賞） 秋元不死男 福田夢汀 石塚友二
組織（会費・支部） 石田波郷 角川源義

関西支部長 平畑静塔

五月一日 「俳人協会会報」 No.1 発行

俳人協会の設立について、俳人協会清規、経過報告、西東三鬼を悼む 秋元不死男、桂郎のこと 石塚友二を内容とし、編集兼発行人・大野林火。他に一五三人の会員名簿を合わせて発行。

五月二十六日 春季総会

東京・有楽町の電気クラブの会議室で開催。出席者五十二人。中村草田男会長健康上の理由により辞任の表明があり、後任会長に水原秋櫻子を推挙。会員数一五三人。

七月一日 第一回全国俳句大会

俳壇として初めての全国俳句大会及び講演会を協会主催、朝日新聞社後援により、東京・有楽町の朝日新聞社ホールで開催。応募作品数六、七三六句、参加者七〇〇名。選者は飯田蛇笏、富安風生、水原秋櫻子、山口青邨、山口誓子、長谷川かな女、星野立子、中村汀女、皆吉爽雨、橋本多佳子、秋元不死男、安住敦、石川桂郎、石田波郷、石塚友二、大野林火、角川源義、岸風三樓、中村草田男、香西照雄、平畑静塔、福田蓼汀、高浜年尾の二十三人。講演は中村草田男「俳句性雑感」、水原秋櫻子「俳句真偽説」、草野心平「光太郎と賢治の交渉」。大会の様子は当日のNHKテレビニュースで全国に放送された。

十月三日 飯田蛇笏逝去

発足以来、顧問の任にあった飯田蛇笏が享年七十七で没した。

十一月二十四日 関西講演会

大阪・大毎講堂で開催。藤田湘子の司会により、岸風三樓が俳人協会設立の経過とその今日的意義について説明。講演は秋元不死男「俳句独語」、石川桂郎「芸について」、水原秋櫻子「芭蕉と蕪村」。来会者約四〇〇人。句会はなく、講演会終了後に朝日ビル地下グリルにおいて関西在住の協会員を主として懇談会が開催された。

十二月八日 第二回俳人協会賞決定

協会員全員に対して受賞候補者の推薦依頼を出し、一〇八通の回答が寄せられた。故西東三鬼『変身』十七票、藤田湘子『雲の流域』九票、村越化石『独眼』六票、福本吾香彦『吾香彦』五票（以下略）となった。

選考委員は幹事会で幹事の投票によって候補者十七人を選出後、高点の左記十二人が水原秋櫻子会長から任命された。石田波郷、中村草田男、秋元不死男、大野林火、安住敦、岸風三樓、平畑静塔、福田蓼汀、石川桂郎、香西照雄、角川源義、石塚友二。東京・富士見町聖富荘において水原秋櫻子会長以下出席の上、詳細に検討の結果、全員一致をもって故西東三鬼の受賞を決定した。

※十月十日 大場白水郎没、七十二歳。

昭和三十八年

三月三十日 三十七年度総会

東京・有楽町の電気クラブで開催。経過報告、会計報告、事業報告及び事業計画案の提案。阿波野青畝が顧問に迎えられ、会員数二一人となった。

五月十一日 第二回全国俳句大会

前年同様、東京・有楽町の朝日新聞社ホールで開催。講演は山口青邨「俳人と文章」、水原秋櫻子「主張の対立」。選者は前回に同じ。参加者は四〇〇余人と前回に比べてやや減。

九月十二日 実行委員会の編成

八月の定例幹事会において、協会の事業その他を積極的に推進するため、現幹事のほかに実行委員会を置き、幹事・実行委員一丸となって実行委員会を組織することに決定し、東京・大松閣において第一回会合、実行委員会を開催した。その陣容は次のとおり。

総務 安住敦・岸風三樓・吉田鴻司・橋本義憲・平間真木子

出版 大野林火・角川源義・香西照雄・林昌華・岡田日郎・秋

元清澄・草間時彦・柏聚

事業 秋元不死男・福田繆汀・石塚友二・藤田湘子・渡辺七三

郎・鷹羽狩行・松崎鉄之介

組織 石田波郷・角川源義(兼)・石川桂郎・藤田湘子(兼)

・岸田雅魚・庄中健吉

渉外 中村草田男・秋元清澄(兼)・松崎鉄之介(兼)

実行委員会の編成後、出版部は『現代俳句選集 第一集』の刊

行に、総務部は会員カード整備等に直ちに着手することとなり、日を改めてそれぞれ会合を重ねた。

十一月十七日 長野県俳人協会設立

長野県俳人協会の設立総会および記念俳句大会を長野市で開催。選者として香西照雄出席。同会の会長に西本一都、副会長に渡辺幻魚・野村冬陽、顧問に木村蕪城・相馬遷子が就任。

十一月 鹿児島県俳人協会(第一次)創立

会長に肝付素方、幹事に米谷静二・竹田琅玕が就任。

十二月八日 第三回俳人協会賞決定

協会員全員から受賞候補の推薦を受け、回答総数一二三票。五

票以上はつぎの四点。小林康治、『玄霜』十八票、橋本多佳子「全業績」十六票、花田春兆『天日無冠』九票、村越化石『独眼』および最近作五票。

選考委員は会長水原秋櫻子ほか前年に同じ。大野林火を議長に活発な意見を交換、全員一致で小林康治『玄霜』に決定。

※五月六日 久保田万太郎没、七十三歳。

※五月二十九日 橋本多佳子没、六十四歳。

昭和三十九年

四月十四日 三十八年度総会

東京・新宿神楽坂の出版クラブで開催。岸風三樓司会により大野林火議長。安住敦の経過報告、秋元不死男の事業報告および事業計画書の提案、決算報告の後、新しく監事に推された遠藤梧逸の監査報告。会員数三一八人、当日の出席者は五十七人。

五月二十三日 水原秋櫻子芸術院賞受賞祝賀会

日本芸術院は四月十日、昭和三十八年度(第二十回)の日本芸術院恩賜賞と、芸術院賞の受賞者を内定、発表したが、水原秋櫻子は俳句における長年の業績が認められ、芸術院賞を受賞することになった。授賞式は五月十九日、東京・上野の芸術院会館で天皇陛下をお迎えして行われた。

これを受けて、俳人協会と馬酔木会の共催により丸の内会館において、祝賀会が開催された。出席者は富安風生、山口青邨、山本健吉、井本農一ほか二二〇人。

五月三十日 第三回全国俳句大会

前年同様、東京・有楽町の朝日新聞社ホールで開催。

石川桂郎、藤田湘子の司会により、応募作品数五、三四八句。

選者は前年に同じ。講演は平畑静塔「東京の季題」と山本健吉「俳句難感」。当日の参会者は三〇〇余人。

十一月十五日『現代俳句選集 第一集』刊

実行委員会（出版部）結成以来、着々と作業は進められ、昭和三十一年四月までの協会員のうち三二七人が参加。戦後から昭和三十八年までの自選三十句と名鑑、並びに香西照雄記の「俳人協会の歩み」を併載。

「俳句の伝統を守る人々を網羅した句集がここにはじめて生まれた。総合句集はいままでにも何回か編まれたことはあるが、かくのごとく純粹に伝統の精神をつらぬいたものはないであろう。我等はこの事に大いなる誇りをおぼえ、喜びを感じるものである」とする会長水原秋櫻子の「序」文がある。編集委員は角川源義・香西照雄・草間時彦・秋元清澄・岡田日郎。A5判布装丁・箱入り豪華本、頒価一、〇〇〇円。

十二月十九日 第四回俳人協会賞決定

協会員全員から受賞候補作の推薦回答、有効一六五票。うち高点順に記すと千代田葛彦『旅人木』二十五票、森総彦『贅福耳』十二票、古館曹人『海峡』十二票、加藤覚範『風の音』九票など。前年同様の選考委員により東京・富士見町の聖富荘において選考委員会が開催された。秋元不死男を議長に活発な意見が交換され、長時間を要したが、結局千代田葛彦『旅人木』に受賞が決定した。

昭和四十年

三月十三日 三十九年度総会

東京・新宿神楽坂の出版クラブで開催。大野林火司会、景山菊吉が議長となり、安住教から会計報告、遠藤梧逸から監査報告があり、秋元不死男から事業報告および事業計画案が提案され、すべて承認された。会員数三八一人、当日の出席者は七十人。

五月三十日 第四回全国俳句大会

前年同様、朝日新聞社ホールで開催。藤田湘子司会で進められ、講演は大野林火「高浜虚子」と小林秀雄「文芸難感」。選者は前年同様で応募作品数は九、六〇〇余句に達した。当日の参加者は五〇〇余人。

十一月二十七日 第一回関西俳句大会

全国俳句大会の四年目を終了したところで、関西俳句大会を発足させた。米沢吾亦紅大会委員長を中心に準備が進められ、大阪府農林会館で開催。当日の講演は山口誓子「安西冬衛氏の詩集」。応募作品数二、五三四句、来会者は予想以上の四〇〇人を超す大盛会となった。選者は水原秋櫻子はかに後藤夜半、大橋桜坡子、中村若沙、五十嵐播水、右城暮石、岡本圭岳、山口波津女、米沢吾亦紅、桂樟蹊子、堀内薫、宮武寒々、下村非文、管標馬ら関西在住者が加わったことも、その一翼を荷ったものである。

十二月十八日 第五回俳人協会賞決定

東京・富士見町の聖富荘で開催。協会員からの被推薦は数十にのぼったが、選考委員会において選考の結果、次の五篇が残った。萩原麦草『枯山仏』、香西照雄『対話』、井沢正江『火櫓』、

鷹羽狩行『誕生』、安住敦『暦日抄』。各作について意見の交換が
交わされ、最後に記名投票の結果、その将来性と新鮮さが高く評
価され、殆ど満票で鷹羽狩行『誕生』に決定した。選考委員は前
回と同じ。

昭和四十一年

一月二十八日 関西支社発足

第一回関西俳句大会の運営に当たった各委員が住友クラブに集合、関西支社の常任委員を決定。年一回の総会、春秋二回の委員会、その他必要に応じて臨時会の開催などを定めた。支部長に米沢吾亦紅、会計に沢田弦四朗、委員に西矢顕史、天野莫秋子、森田峠、藤野基一、見市六冬、浦野芳南、亀井糸游、三好潤子、大竹きみ江、宮井港青、後藤比奈夫。

二月十七日 新事務所の移転

協会発足以来、角川書店内にあった協会事務所が東京都渋谷区四ノ一〇日本デザインスクール会館内に移転、引越した。

三月 幹事追加

協会運営を円滑ならしめるため、今回会長並びに幹事会の推薦により皆吉爽雨、能村登四郎、林翔、加畑吉男が幹事に追加された。

三月二十六日 四十年総会

東京・大手町の通信総合博物館地下ホールで開催。議長景山笥吉、安住敦から決算報告、遠藤梧逸から監査報告、秋元不死男から事業報告および事業計画案を提案、すべて承認された。次に岸風三樓から俳人協会規約改正案の説明があり、活発な応答があったが、最終的には原案どおり承認された。

これまでは当初の「清規」によって運営されてきたのであるが、はじめて規約らしい規約が定められたのである。その主な改正点をあげると、

(ア) 幹事の選出を全会員の互選（投票）とする。

(イ) 新しく評議員をもうけた。

(ウ) 会長、顧問の推戴及び監事の選任を総会事項とした。

(エ) 事業年度、総会付議事項等を明らかにするとともに、各条に関連するものについての、常識的な項の整備を図った。

以上であり、新幹事選出までの常任幹事は、これまでの「清規」による幹事が当たることになった。会員数四八六人、当日の出席者は七十八人。

四月二十四日 水原会長芸術院会員就任祝賀会

東京・目白の椿山荘で俳人協会と馬酔木会の共催により開催。安住敦の司会により、富安風生、山口青邨、井本農一、山本健吉、中村草田男、角川源義らが祝辞を述べた。

五月二十九日 第五回全国俳句大会

前年同様、朝日新聞社ホールで開催。藤田湘子司会で進められ、講演は富安風生「俳句雑感」と伊藤整一「芸術と生活者」。選者には新たに米沢吾亦紅、後藤夜半が加わり、応募作品数は一万二、五〇〇句とはじめて一万句を超した。

七月五日 新幹事の選出

新規約に基づく幹事選出は、選挙管理会（山崎ひさを・加藤寛範・清水径子）をもうけて、五〇九人の全会員に対して往復はがきによる投票を行った。その結果、七月五日締切として、次のように幹事が選出された。

秋元不死男、角川源義、安住敦、大野林火、中村草田男、石田波郷、石川桂郎、岸風三樓、平畑静塔、石塚友二、福田繆汀、香西照雄、皆吉爽雨、能村登四郎、加畑吉男、草間時彦、米沢吾亦

紅、林翔、清崎敏郎、鷹羽狩行、岸田稚魚（以上、得票順）

九月八日 新幹事会の開催

新しく選出された幹事による幹事会を開催。遠隔地にある米沢吾亦紅、平畑静塔、および病臥中の石田波郷の三人を除く全幹事を常任幹事として協会の運営に当たることとした。引き続き幹事長等の選任について協議の結果、幹事長・秋元不死男、副幹事長・安住敦、大野林火、会計幹事・岸風三樓とした。

また、これまでの実行委員会を発展的に解消し、新たに次のように改組、幹事の方担事項を定めた。

総務部（各部の総合調整、総会・幹事会等の開催事務、協会報の発行、その他庶務）

部長 安住敦、加畑吉男、岸田稚魚

経理部（会計、財務）

部長 岸風三樓、鷹羽狩行

組織部（支部組織の確立、新会員の推薦等）

部長 皆吉爽雨、石塚友二、能村登四郎（米沢吾亦紅）

事業部（中央地方における各種の句会、講演会等の実施、協会賞）

賞

部長 大野林火、福田蓼汀、石川桂郎、林翔

出版部（俳人協会アンソロジーの作成、会員句集の推薦発行、その他の出版）

その他の出版

部長 角川源義、清崎敏郎、草間時彦

企画広報部（各種文化団体等との交流折衝、将来計画等の基本方針の策定）

方針の策定

部長 中村草田男、香西照雄（石田波郷、平畑静塔）

十一月二十日 第二回関西俳句大会

大阪本町の住友生命ビルのホールで開催。水原秋櫻子会長、阿波野青畝顧問挨拶。講演は角川源義「芭蕉について」。応募作品数三、一二二句、選者はほぼ前会同様。参加者二五〇人。

十二月十七日 第六回俳人協会賞決定

東京・富士見町の聖富荘で開催。協会員二四四人から推薦された受賞候補作品は句集五〇冊、俳誌発表作品一七篇あったが、審査の結果一〇篇を残した。そのうちから二名連記の投票の結果、磯貝碧蹄館『握手』十票、稲垣きくの『冬濤』十票、『木下夕爾句集』六票となり、上位二者を受賞と決定した。

なお、今回から林翔、加畑吉男、岸田稚魚、清崎敏郎、草間時彦、能村登四郎、鷹羽狩行が選考委員に加わり、十八人。

昭和四十二年

三月二十五日 四十一年度総会

東京・大手町の通信総合博物館地階ホールで開催。司会草間時彦、議長今棧一によって進行され、秋元不死男から経過報告、大野林火から事業報告および事業計画案、岸風三樓から決算報告、遠藤梧逸から監査報告が行われすべて承認された。会員数五四四人、出席者七十七人。

議事終了後に五所平之助の講演「映画と俳句」があった。

長谷川かな女、野村喜舟顧問に就任。また、安藤五百枝・五十嵐播水・池上浩山人・石井桐陰・石城暮石・大竹孤悠・大橋越央子・大橋桜坡子・岡本圭岳・景山筍吉・桂樟隠子・勝又一透・金子麒麟草・木村蕪城・京極杜藻・後藤夜半・佐野まもる・三溝沙美・下村非文・下村ひろし・相馬遷子・菅裸馬・中村春逸・徳永

山冬子・中村汀女・中村若沙・橋本鶏二・細木芒角星・堀喬人・堀内薫・松原地蔵尊・松野自得・宮武寒々・三宅一鳴・三宅清三郎・山本嵯迷・吉田洋一・渡辺桂子の三十八人が評議員の委嘱を受けた。

五月二十八日 第六回全国俳句大会

前年同様、東京・朝日新聞社ホールで開催。応募作品は一万三、六〇〇句に達した。岸風三樓、草間時彦の司会によって進行され、講演は秋元不死男「俳句と教」、河盛好蔵「フランス人の見た俳句」。本大会から選者に佐野まもる・遠藤梧逸・橋本鶏二・能村登四郎らが加わった。

六月二十五日 関西懇親会

大阪・梅田の新阪急ホテル地階ダイニング・ルームで開催。顧問の阿波野青畝、支部長の米沢吾亦紅ほか関西在住の協会員三十人が出席し、懇談を交した。

十一月五日 長野県俳人協会第五回大会

長野市善光寺山内の紫雲閣で開催。午前中、役員改選が行われ、会長に相馬遷子、副会長に野村冬陽・中村浪香・細田高夷を選出、事務局長の渡辺幻魚は留任した。午後は俳句大会を開催し、一〇〇余人の参加者があった。

十一月十五日 『現代俳句選集 第二集』刊

昭和四十二年六月現在までの会員のうち五二三人が参加。昭和三十八年十一月以降の作品から自選三〇句と名鑑、並びに加畑吉男記の「俳人協会の歩み」と「俳人協会規約」を併載。会長水原秋櫻子「序」文。編集委員は委員長||角川源義、委員||岡田日郎・加畑吉男・清崎敏郎・草間時彦・草村素子・香西照雄・清水径

子・鷹羽狩行・成瀬櫻桃子・能村登四郎・林翔・松崎鉄之介・松本旭・八木林之助の十五人。装丁等は第一集に準じ、頒価一、五〇〇円。

十一月十九日 第三回関西俳句大会

大阪・東区の住友生命本町ビル九階ホールで開催。講演は中村草田男「自覚的自然愛」、応募作品数四、二七五句、参加者三五〇余人に達した。選者は前年にほぼ同じ。懇親会終了後、秋元不死男の司会により水原秋櫻子・山口誓子・阿波野青畝・中村草田男による俳壇史的座談会が行われた。

十一月二十二日 俳人協会賞予備選考委員会

東京・渋谷宮益坂ハッピーで開催。全協会員による受賞作品の投票を参考にして七人の選考委員（林翔・草間時彦・岸田稚魚・香西照雄・加畑吉男・清崎敏郎・鷹羽狩行）によって十篇が選出された。

十二月十六日 第七回俳人協会賞

東京・富士見町の聖富荘で開催。水原秋櫻子・秋元不死男・安住敦・石塚友二・大野林火・角川源義・能村登四郎・福田蓼汀・皆吉爽雨・平畑静塔（書面参加）の十人と先の予備選考委員が加わり、大野林火の議長によって進められた。最終的に及川貞「夕焼」と菖蒲あや「路地」の二句集が受賞と決定した。

昭和四十三年

三月三十日

・四十二年度総会

東京・飯田橋の東京大神宮会館で開催。草間時彦の司会により景山筍吉議長。秋元不死男から経過報告、福田蓼汀から事業報告および事業計画案、岸風三樓から決算報告、遠藤梧逸から監査報告が行われ、全議案が承認された。会員数六一〇人、当日の出席者九十六人。

議事終了後に吉田洋一の講演「俳句と数学」があった。

・第一回評議員懇談会

総会当日の午前十一時から同会場において幹事および評議員の初懇談会が行われた。出席評議員は、景山筍吉・勝又一透・中村春逸・細木芒角星・堀喬人・松野自得・三宅一鳴・三宅清三郎・山本嵯迷・吉田洋一・大竹孤悠・金子麒麟草の十二人。

四月八日 事務所移転

東京都目黒区自由ヶ丘二ノ九ノ二三へ事務所が移転した。

六月三十日 第七回全国俳句大会

前年同様、東京・有楽町の朝日新聞社ホールで開催。応募作品数一万三〇七句。草間時彦の司会によって進行され、講演は荒垣秀雄「日本人の自然愛」、安住敦「久保田万太郎の俳句」。選者は前年に同じ。参加者は六〇〇人に達し、会場を埋め尽くした。

八月二十五日 開西支社第二回懇親会

大阪府立労働会館で開催。出席者二〇人で淋しかったが、滋賀県の藤沢石山、和歌山県の河野閑子、淡路の服部嵐翠らが出席して活気づいた。

十一月十七日 第四回関西俳句大会

大阪・上六の大阪府教育会館で開催。講演は大野林火「大正初期の人々」、応募作品数三、四〇一句。選者はほぼ前年に同じ。

十一月二十二日 俳人協会賞予備審査会

前年同様、全協会員から推薦された候補作に対して予備審査会（前年の七人に能村登四郎参加）によって九篇が選出された。

十二月十四日 第八回俳人協会賞

東京・飯田橋の東京大神宮会館で開催。前年の選考委員のほかに富安風生・山口青邨・阿波野青畝・山口誓子・石川桂郎・石田波郷・米沢吾亦紅が委員に名を連ねた。決選投票の結果、上田五千石「田園」に決定した。

昭和四十四年

三月二十九日

・四十三年度総会

東京・飯田橋の東京大神宮会館で開催。鷹羽狩行の司会により堀喬人議長。秋元不死男から経過報告、事業報告および事業計画案、岸風三樓から会計報告、遠藤梧逸から監査報告が行われ全議案が承認された。会員数六七八人、当日の出席九十六人。

議事終了後に景山筍吉の講演「キリスト教と季語」があった。

・第二回評議員懇談会

総会当日の午前十一時から同会場において幹事および評議員の懇談会が行われた。出席評議員は木村蕪城・景山筍吉・堀喬人・大竹孤悠・中村春逸・細木芒角星・京極杜藻・三宅一鳴・山本嵯

迷の九人。

六月十五日 第八回全国俳句大会

前年同様、東京・有楽町の朝日新聞社ホールで開催。応募作品数一万二、〇〇〇余句。能村登四郎の司会によって進行され、講演は水原秋櫻子「蕪村の句の一面」、井上靖「文芸雑感」。選者はほぼ前年に同じで、参会者も前年同様六〇〇人を超した。

七月二十一日 新幹事互選

村山古郷・山崎ひさを・清水径子を選挙管理委員とし、協会員六八八人に對し、幹事推薦の往復はがきを發送。その結果、秋元不死男はか三十二人を新幹事として選出。次のような分担体制を敷いた。病臥中の石田波郷は幹事を辞退したので、右城暮石を幹事として追加した。

幹事長・秋元不死男、副幹事長・安住敦、同草間時彦

総務部（会員の動勢、各部の総合調整、総会、幹事会等の開催、協会報の発行、その他庶務）

部長 岸風三樓・加畑吉男・轡田進

會計部（會計、財務）

部長 松崎鉄之介・鷹羽狩行

組織部（支部組織の確立、新会員の推薦等）

部長 福田蓼汀・能村登四郎・澤木欣一

事業部（全国俳句大会、各種の句会、講演会、俳句講座等の実施、および協会賞に関する事項等）

部長 草間時彦・岸田稚魚・有働亨・千代田葛彦・成瀬櫻桃

子・鷹羽狩行・原裕・上田五千石

出版部（俳人協会アンソロジーの作成、会員句集の推薦発行その他）

部長 角川源義・林翔・松本旭・原裕・清崎敏郎
企画・広報部（諸計画の策定、各種文化団体との交流接衝など）
部長 香西照雄・加倉井秋を・木村蕪城

無任所 中村草田男・石川桂郎・石塚友二・皆吉爽雨・平畑靜
塔・米沢吾亦紅・森田峠・右城暮石

九月二十八日 会員懇親吟行

鎌倉市山の内、建長寺大書院を会場に開催。神奈川県内在住の大野林火・秋元不死男・石塚友二・原コウ子・小林康治・野沢節子・鷹羽狩行・皆川白陀を特別選者として行われ、一〇〇人を超す参会者があった。

十一月九日 第五回関西俳句大会

大阪 天王寺の大阪府教育会館で開催。辻田克巳の司会によって進められ、講演は山口青邨「俳句を支えるもの」。応募作品数三、七六七句、選者はほぼ前年に同じであるが、参会者は三〇〇人に達した。

十一月二十一日 事務所移転

横浜市港北区下田町九二四に事務所を移転した。

十一月二十一日 石田波郷没、五十七歳。

当協会発足以来幹事等の任にあった石田波郷が永眠された。享年五十六歳八か月。

十一月二十一日 俳人協会賞予備審査会

東京・飯田橋の東京大神宮会館で開催。協会員からの推薦四十九篇。予備選考は委員（上田五千石・有働亨・加畑吉男・轡田